

人をつなぎ 未来をつなぐ
 明石のコミュニティ・スクールだより
 KOMIKOMISUKUSUKU
 未来への教育を考える特別号

明石市教育委員会事務局学校教育課
 mail : gakkyo@city.akashi.lg.jp



TwitterQR
 未来への教育を考える特別号
 No.7 2021.2.16

Meet de 対話 Part4 の報告です

「国語教材“町の未来をえがこう”から始まる地域との連携」
 ～授業から始まる“いい学校づくり=いいまちづくり”～

2月9日に Meet de 対話 Part4 をオンラインで開催しました。当日は先生方、市民の方等 40 名近くのみなさんにご参加いただき対話することができ、ありがとうございました。「国語教材“町の未来をえがこう”から始まる地域との連携～授業から始まる“いい学校づくり=いいまちづくり”～」のテーマに沿って実践例をベースに対話が行われました。実践例として次の2つを提案していただきました。

- (1) 魚住まちづくり協議会事務局実践発表（菊井祥起さん）
 「あんなまち こんなまち 多様な人で考えるまちの姿」
- (2) 松が丘小学校実践発表（平田耕一教諭、村上謙太郎教諭）
 “学年戦略としての「カリキュラム・マネジメントマップ」”

Meet de 対話 Part4 紹介シリーズでは今号では魚住まちづくり協議会事務局実践発表を、シリーズ2では松が丘小学校実践発表を、そしてシリーズ3で今回の対話をファシリテーターと記録の立場から振り返り、シリーズ4でいただいたご感想をご紹介させていただく予定です。

「あんなまち こんなまち 多様な人で考えるまちの姿」

魚住まちづくり協議会事務局実践発表（菊井祥起さん）



プレゼンでは“まちづくり協議会”の説明から始まりました。まちづくりを進める上で子どもたちの意見を聞きたいという願いを持っておられたまち協さんから学校に相談する中で、6年生の国語教材で地域づくりについて一緒に学べる機会があることを知りました。そういった今回の取組に至った経過や、3回の授業の様子、そしてこの授業から学んだこと、考えたことを駄菓子屋の例をあげながら私たちに投げかけていただきました。今回は3時間という限られた時間の中での取組でしたが、プレゼンを聞きながら、また駄菓子屋の例を考えながらここからがスタートなのではと思えてきました。そしてプレゼンの中の「魚住まちづくり協議会事務局一同さんからの6年生へのお手紙」と「まとめ」は未来を創り、社会を支える子どもたちを育てるためのこれからの学校・地域・保護者の協働を進める上で、一度校内で、また学校運営協議会で、また各校区のまちづくり協議会さんで読み、対話してみる価値があるのではと思いました。

※1（まちづくり協議会さんから6年生へのお手紙）

6年生の皆さんへ

今回は初めての楽しい体験をさせてもらってありがとう。

今まで私たちは、子どもたちのために何ができるかという発想で活動をやってきました。

しかし、今回の授業を通じてそれが間違っていることが良く分かりました。

皆さんは立派な地域住民です。自分で色々考え、主体的に提案や行動ができる可能性をととも感じました。

今まちづくりに一番必要なことは、子どもからお年寄りまで含めた地域住民がつながり、人任せでなく自分事として出来る事を考え、楽しく、継続的に活動し「みんなが住みよい幸せなまち・魚住」を創り上げることです。

これからも、みんなは魚住校区に住み続ける住民です。

中学生になっても色々な形でつながりながら、一緒に頑張っていきましょう！

魚住まちづくり協議会 事務局一同

※2

まとめ

- ・学校の授業で地域や社会のことを考える機会を増やしていくことが大切
- ・子どもたちの意見を一つ一つ取り上げていくと新しい気づきを得られる

最後に、Meet de 対話 Part4 終了後菊井さんから届いたお手紙をご紹介します。

本日はありがとうございました。私自身も学びある場となり、有意義な時間を過ごすことができました。Meet de 対話後、まち協で話をしていた中でカリキュラム・マネジメントマップが実現できることが理想であるなあと考えています。6年生の子どもたちを対象に授業を行い、授業ではじめて地域に対して興味関心を持ったが、実際に自分たちが次につなげられる活動できる場が現状ではあません。このようなことでは地域で過ごす子どもたちが実際に活躍する機会もなく、村上先生も仰っていましたが感謝される機会がないと思っています。私は教育者ではないため、偉そうなことは言えませんが、子どもたちは自分が褒められることで、次も同じ活動をしたいといった原動力にもなっているのではないのかと思います。地域目線としては子どもたちに自分たちが過ごすまちに愛着を持って生活してほしいと願い、自分たちがこの地域でよかったというようなプラスの気持ちを持って活動している方がほとんどです。ですが、地域の人にとっては学校に対しては敷居が高くないということは言い切れないと思います。そのようなことから小学生が地域で活動する。その行動に対して地域の人々がバックアップする、支えてあげるといったことから、地域と学校の連携というものが生まれてくるのではないのかと思っています。また、つながりを持った後のつながり(持続性)を確保することも必要であると思いました。学校と地域がコミュニティ・スクールを展開していく中で、子どもをピラミッドで表すならば頂点に置き、その支えとなる部分は学校と地域が融合して子どもたちを支えているそのようなピラミッドの表し方が、一番私たちが思っている学校と地域の姿でもあるかと思っています。学校には学校しかできないこと、地域には地域にしかできないことがあるかと思っています。それらのよい部分を切り取って授業が展開されると子どもたちの学びも広がっていくのではないのかと思いました。また、小学校で学んだことが中学校で途切れてしまうともったいないとも思います。本日、ご送付頂きましたコミュニティ・スクール未来への教育号 No.6 の中に北迫さんが述べられていましたが、一貫した生涯教育ということも視野にいれて今後は動いていくことが欠かせないともふと思いました。最後ジャムボードの千原さんからのまとめでもありましたが、地域と学校が互いにつながる(寄り添う、ちょっとアンテナを広げる)ことによって今まで見えていなかった世界を見ることができるようになるとも思っています。

今回プレゼンをしていただいた菊井さんは、実は松が丘小・朝霧中出身です。菊井さんは高校時代、高校の活動の一環として魚住まちづくり協議会に出会い、まちづくりについて学び、大学生になって活動の幅を広げていっておられます。菊井さんを見てみると、高校生が高校のある地域や地元と何らかの形で地域につながり、社会の中で継続して活動できる仕組みが必要なのではと思います。それが菊井さんの手紙の中にある「一貫した生涯教育」につながるのではと思います。ご意見・ご感想をお待ちしています。また、対話の動画の共有をご希望の方はご連絡ください。(文責：北本)